

令和5年度一般入試個別学力検査【前期日程】「国語」

I (配点90点) 出典：久野愛『視覚化する味覚——食を彩る資本主義』

この文章では、二〇世紀後半以降に消費者が求めていた食品や食生活の自然さについて、「自然」と「人工」の間の線引きの難しさ、「自然」さが客観的基準によって定められるわけではないこと、食物の自然さの観念がさまざまな要因によって変化することなどが論じられている。これら諸点を読み取ることができているかどうか、確認する設問を出題した。

問一 A 既製 B 抽出 C 塗料 D 症例 E 揺 F 示唆
漢字書き取り問題は、単に漢字を知っているのかを確認しているのではなく、文脈とそれに応じた語彙の理解を問うている。Aの「きせい」を「既成」とする誤答が目立ったが、「既成事実」や「既成概念」はコト、「既製品」はモノのように違いがある。本文中の「きせい」は後者である。

問二 カギ括弧を使用しているのは、人間の手が加わっていない、という「天然」「自然」の本来の意味ではないことを示すためである。それだけでなく、化学合成によって作り出されたり、人工的操作によって開発されたりした食品に使用されるなど、本来の意味とは矛盾した意味であることを強調する効果もある。十分な解答であるためには、これら二つのポイントを満たしている必要がある。

問三 リコピンは「自然」由来の色素であるが、抽出という作業は「人工的」である。一方、リコピンで発色するイチゴの色は「人工的」な操作によって得られるが、イチゴの「自然」な色に見える。このように、「自然」と「人工的」は概念としては相反するが、現実の食物においては、「自然」か「人工的」か、線引きすることが難しい。傍線部前後の文脈を理解していれば、このような内容を含んだ解答が導かれるが、設問で「どの程度」と問うていることに留意し、それを解答に反映させてほしい。「線引きの難しさ」や「境界が曖昧」などの表現を使用していると良い。

問四 まず、食物の本来の自然性が動植物の生体的特徴や環境によることを踏まえることが必要である。しかし、現実にはそうではなく、「文化」「社会」「政治」に自然性の基準を求めている。「文化」「社会」「政治」の具体的な内容については、「文化」や「社会」が大量生産や大量消費による画一性のこと、「政治」が食品の規制法の基準に関すること、と本文中に記されているので、解答に反映させやすい。また「自然」がじつは、本来的に存在するものではなく、人が自然だと思ふ観念上の「産物」であるということの意味を、きちんと文章としてまとめられているかどうか、ポイントとなる。

問五 食品の色を「単なる外的特徴」と表現しているのは、野菜や果物、肉や魚の色は本

来、生育環境や気候の変化に応じて変わるものであるにもかかわらず、そうした要因とは切り離して、消費者が「正しい」「自然だ」と思う色を作り出して一定の色の食品を作り出しているからである。何よりも重要なポイントは「生育環境や気候の変化などの要因と切り離す」という点である。

問六 (a) 「自然」や「有機」といった概念が「曖昧な意味」になるのは、規制の定義を超えて、いくつかのイメージと結びつくからである。そのイメージを文中の言語表現から見つけるならば、「健康」「エシカル」「サステナブル(持続可能)」が相当する。また「広まるようにもなった」というのは、どのようにして広まったのかを具体的に説明する必要がある。それは「儲かるビジネス」と認識されることで広まったということである。

(b) 前後の内容をまとめれば、大規模スーパーや大手食品企業などが、消費者の「自然」なものへの関心に目をつけて、自然食品や有機食品と銘打った加工食品の製造、販売をビジネスにするようになったから、のような解答が導かれるであろう。

問七 ここでは「自然さ」に対する認識の変化を問うているので、以前の自然観と以後のそれを比較して論じる必要がある。以前の自然観は、社会生活が大量生産、大量消費を前提にしていた時代の食品についてのことで、品質規定にもとづいて、大多数の人が「正しい」「自然」と思うような画一性が特徴である。しかし、ライフスタイルを見直すなかで、生産者と消費者のあいだで、規定から外れた、色や形が均一でない農作物のほうが「自然」であり、「おいしそうに見える」ことよりも見かけに関係なく「おいしい」ことに価値を置くようになった。解答では文末を、「変化した」や「ようになった」のように変化が明示される形でまとめる必要がある。

問八 問六、問七は主に食物の「自然さ」への認識の変化や、食物と人との関わり方の変化を論じる設問であったが、ここでは変化のない、「一貫していること」のほうを問うている。ただし、特定の箇所に集中して述べられているわけではないので、もう一度、文章全体を読み直す必要がある。たしかに、二〇世紀後半の大量生産、大量消費社会を存続させるなかで新たに生まれた食品の自然性と、二〇〇〇年代以降のライフスタイルの見直しのなかでの有機や自然への回帰、さらにそれを推し進めた「アグリーフードムーブメント」などとは、「自然さ」に対する認識は大きく変化している。しかし、文章全体を読めば、その変化はいずれも資本主義社会における「ビジネスモデル」という枠組みのもとでの変化であり、その枠組みのなかでの生産者と消費者という関係は一貫している。部分的な理解ではなく、文章を全体として把握しないと、このような問いに対する解答を導くことはむずかしい。残念ながら、正答率は極めて低かった。文章に通底する骨子を抽出するような読み方を学んでほしい。

Ⅱ (配点 60 点) 出典：根岸鎮衛『耳囊』

江戸時代中期の随筆『耳囊』より、石黒平次太なる男が、心中しようとしていた若い男女を助け、最後には晴れて結婚できるように世話してやるという話。親が認めてくれない

ので死ぬという二人を引き留めた石黒が、単に二人に替わって親に交渉・説得するのではなく、見つけたことは親にはさしあたり黙っておき、死んだと思って自分の子供にしてもよいかと認めさせておいてから、結婚させて、そしてもとの親のもとに戻してやるという粹な計らいをしたというのが読みどころ。

問一 短い語句の現代語訳を問うもの。文脈にあわせた多少こなれた訳は認められる。比較的よくできていた。Dの「露をも頼み」は比喩であるので、そのまま「露をも頼りにする」では不十分である。「うち過ぎる」など、現代語にはまずない表現を少しだけ言い換えて「うち過ぎてしまった」として済ませているものも十全な解答とは言えない。

問二 今にも二人が飛び込もうとしていると思われたので、の意。「かう」は入水心中を指す。比較的よくできていたが、「石黒は止めようと思った」とまでするのはやや書きすぎである。「今はかう」とあるので、これは男女の行動を指し、「思う」はそれが実行されてしまう、と石黒が「思った」ということであって、石黒の「止めねば」という意思を指す「思う」ではない。「飛び込んでしまう!」と思ったからこそ、続く箇所「早速立ち寄りて引き留め」たのである。また、「今は心中する(死ぬ)には早い、若い」という解答もあったが、これはふさわしくない。それでは、もう少し年がいったら心中すればいい(死ねばいい)と考えていることになってしまう。

問三 現代語訳の問題。やや訳しにくい一文である。「殺し候ふことなり難し」は、そのまま置き換えると「殺しますことになることは難しい」だが、いささかぎこちないのでもう少しこなれた訳にしても良い。「見付けては」の「ては」は、現代語で言う「～たからには」「～た以上」がなじむ。「見付けては」を承けて「殺し候ふこと」は、いわゆる「見殺しにしますようなこと」といった表現が妥当。

問四 (a) 何やら物騒がしい不吉なご様子ですね、どうしましたかといった意。bの設問があるように、石黒は事情を知っているのに、いわばとぼけて、初めてこの場で本件に関わったかのように聞いているのである。

(b) 石黒は事情を知らないふりをして、息子・娘の消息を伏せた。その上で、はじめて事情を聞くような形にすることで、子供達の両親が、石黒を頼り、万事自分にこのことを任せるように仕向け、そして果たして二人を見つけ出したと演出するのである。こういう石黒のねらいを理解できている解答であればよい。

問五 もし二人が申し合わせでもして、心中でもしてしまったらと両親の嘆きは一通りではない、ということ。直前に「駆け落ち」とあって、傍線部には「相ひ果て」、つまりは死んでしまうとある。ここをそのまま「相い果てる」(現代語でこういう言い方は普通しない)とするのでは不十分で、明確に「心中」や「二人して命を絶つ」などと解釈してほしい。両親は、息子・娘ともに行方不明なので、最悪の事態を想像して、心配のあまり激しく狼狽しているのである。その予想は半分、当たっていたわけだが、石黒のおかげで命は助かった。

問六 子供達は死んだと思って、自分たちに預けてくれないか、と提案するということは、つまり石黒が二人の親になるわけだから、本当の親の方はもう口だしできない。そうやって、親の意向で阻まれてきた結婚を、二人の望むようかなえてやろうとしたのである。その後、二人を本当の親のもとに返す。「いかにも差し上げ申すべし」との言葉を両親から引き出した石黒は、「さらば語り聞かせん」（問七）と顛末を語っていくのであった。

問七 本文全体のまとめに関わる問題。傍線部の直後に「かくかくの訳」とあるがそのまま「かくかくしかじか」などと書くのでは解答になっておらず、不十分である。問題文前半で語られているエピソードを簡潔にまとめる必要がある。解答例としては、次の通り。夜ふけの川辺で、男女が心中していまにも飛び込みそうだったのでこれを止めた。死なせてほしいと聞かないのをともかくも言い聞かせて連れ帰って詳しく訳を聞くと、親が結婚を許してくれないからだという。そこで自分にまかせよと請け負って両家の両親（あなたがた）に掛け合うことにした。

Ⅲ（配点 50 点） 出典：〔宋〕司馬光『資治通鑑』

後漢の博士の張佚および桓榮が、学識によって光武帝に認められた逸話。張佚は、皇帝の意向に忖度せず、天下の賢才を太子の教育係にすべきだと主張する。その言行を評価した光武帝は、張佚を太子太傅に、桓榮を太子少傅に任じた。

登場人物の立場や関係を押さえながら、書いてある内容を着実に読み取ってほしい。

問一 基本的な読みを問うた。a「もとより」、b「すなはち」。どちらも基本的な語であり、よくできていた。

問二 語句解釈の問題。「正色（色を正す）」とは、「まじめな顔をする」「厳正な顔つきになる」こと。ここでは、群臣たちが皇帝に阿諛追従するのに対し、反対意見を主張しようとする張佚の厳粛な態度を示している。

問三 内容把握の問題。「可」とは、傅（太子の教育指導係）としてもかまわない、ということ。光武帝が（天下のためでなく、）陰氏の繫榮のために太子を立てたのなら、陰識を太子の教育係としてもよいという。

問四 書き下しの問題。「宜しく天下の賢才を用ふ（用ゐる）べし」。再読文字の「宜しく～べし」は基本。よくできていた。ただ、急いだためか、「宜」の字に書き誤る答案があった。注意されたい。

問五 （a）書き下しの問題。「いはんやたいしをや」。「況～乎」は「いはんや～をや」。正答率は高かったが、「を」の脱落した答案がままあった。

（b）現代語訳の問題。「況」は、まして、なおさらの意。張佚は皇帝の誤りを正すので

すらはばからないのだから、ましてや太子に対してはなおさらだ（なおさら恐れず正しい意見を述べるだろう）、といった訳ができていればよい。

問六 （a）書き下しの問題。「つとめざるべけんや」。「可～哉（乎）」は、「べけんや」と読み、反語の表現。「つとむ」「ず」の活用の誤りがまま見られた。

（b）内容把握の問題。学生たちを前に、古典の研究の大切さを説く場面であることを押さえておこう。「太子少傅に任じられた（車馬を賜った）のも古典をしっかり学んだおかげであるから、勉学にはげまなければならない」という意のことが答えられていればよい。